

塀の中の懲りない面々2

安部 譲二

塀の中の 懲りない面々 2

安部譲二



文藝春秋

堀の中の懲りない面々^{めんめん}2

昭和六十三年二月十日 第一刷

定価一〇〇〇円

著者 安部^{あべ} 譲^{じょう} 二^じ

発行者 西 永達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三—二三
電話 〇三(二六五)一二一一

印刷 理想社
付物印刷 凸版印刷
製本 矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Jōji Abe 1968

Printed in Japan

ISBN 4-16-342130-0

塀の中の懲りない面々2 ◆ 目次

第一部 塀の中から

府中刊務所のお正月

つくしの丘は消えた

秋刀魚さんまの頭で大立回り

トージョーの木の芽時

塀の中のポストマン

デイジョンの唐手

副社長の服役

二度は生えない？

69

63

40

34

28

22

16

10

種目があれば金メダル

75

満期が見えたら……

81

婦人刑務所営繕係

87

ケダモンのぼやき

93

スッポン男、清松

99

ゴメンで済^すむんだ

105

拘置所からのお悔み

111

倅せの共通頂を探せ

117

唐辛子の芽が出たぞ

123

易者ダブ洛克の大予言

129

私の舎弟はコロンプス

135

ゴリ名人のハマさん

141

塀の中に忍び込んだ男

147

能ある鷹は将棋が稼しぎ

153

実の欠けたトウモロコシ

159

玉信仰の信徒たち

165

年寄りに歳を訊くな

171

金持は懲役に来ない

177

鯨の仕返し

183

盗^とるまじ空財布

201

鰺^{かじ}沢^{かさわ}の石は男でござる

219

第二部 塀の外にて

実録・塀の中の紳士録

246

対談 親分お久し振りでござんす

260

あとがき

284

A 装
D 画
坂 船
田 久
政 保
則 直
樹

塀の中の懲^こりない面々^{めんめん}
2

第一部

塀の中から

府中刑務所のお正月

塀の中で書き溜めた、大学ノートの日記のようなものをとり出して、暮とお正月のことを調べようと思いましたが、ノートの裏表紙に「筆記帳使用願」という紙が、どのノートにも貼つてあるのに気がつきました。

この紙は、服役中の私が、舎房で私物のノートを使う際に、官に願ひ出て、官がそれを許可したという、願書と許可証、それに検閲を受けた時の検印欄も兼ねている、裏表紙よりひとまわり小さな紙でした。

こんな紙に印刷してあることでも、今読んでみると、塀の中と、支配している官の様子が、ひしひしと伝わって来る想いがしますから、こんな機会に御披露しておきましょう。

筆記帳使用願と太い字で刷り込んである次の行には、やや小さい字で、

「左記事項に違反した時は、記載事項の削除、抹消、雑記帳の使用停止の処分を受け、又はそ

のことで規律違反行為として懲罰を受けても異存はありませんので、筆記帳の使用について許可願います」

と句読点をケチった役人製の文章が、二行にベタツと刷ってあります。次の行には年月日の下に称呼番号とあり、手書きで書いてあるのが私の囚人番号です。その下に氏名とあるところには、私の名前と拇印が押してあります。

次にまた、記とあって、その次の行に、

「一 次の事項を書かないこと」

と此処からは願ではなく、命令のようで、

「1 文意不明なもの、暗号、外国語及び所内生活を歪曲したり誹謗するもの」

「2 他人を脅迫、侮辱、中傷するもの、好色、いん蕩、不良行状を讃美するもの」

「3 犯罪をそのかすもの、犯罪の手段、教唆、通謀を内容とするもの、所内の秩序びんらんをあり、そのかすもの、施設の配置図、警備に関するもの」

「4 親族等申告票に記載されている者以外の住所、氏名、電話番号等」

「5 その他教化上不適當と認められるもの」

その次の二、と三、は、ノートの使い方の注意で、四に、

「四 提出を命ぜられたときは、いつでも提出すること」

とあって最後に、検査年月日と検閲者印の升目が、縦一杯二列に設けてあって、上の欄外に

「北部第五工場」とゴム判が押してあり、その横に太い黒枠で升目が四つ、担当、係長、区長、課長とあるのは、似たようなものでも、きつとその順に偉いのでしょう。

これは官の文書の典型のようなものでしたから、御紹介することにしたのですが、なんとも浮世離れのした文章で、「いん蕩」とか「秩序びんらん」なんて、官の好みの、なんとも言えず嫌な言葉が矢鱈と使っていました。

こんな具合ですから、書きたいことを書くといないんでもばくられてしまうので、大事なことは苦心の暗号で記録してあります。その他は、私のノートの大部分が、プロ野球のことと、食べ物のことと埋めつくされていたのです。

プロ野球は、それで塀の中では命から三番目ほどにも大事な通貨である私物の日用品を賭け、目をつりあげて博奕ばくちをするのですから、これは書いてあっても当然なのですが、食べ物のことが呆れるほど丹念に書いてあるのは、私が並はずれた食いしんぼうだからでしょう。

煙草を吸わない男、インポテント、坊主刈でも構わない奴、屈辱が平チャラな男、塀の外だと衣食住のままならない人。

こういった連中は、それぞれそうでない者より塀の中の毎日が過し易いのですが、不幸にも私はそのどれでもなくて、さらに酒飲みの食いしんぼうでしたから、塀の中の辛さは人並以上の、さらにもひとつ上でした。

判事も量刑に際しては、この辺りもきめ細かく考えに入れてくれなければ、公平ではないと

思うのですが、いつでも何故か、私に言い渡される刑は高かったです。

手前勝手はさておき……。

面会所の待合室に貼り出してある献立は、見た目にはとても素晴らしく見えるので、塀の外から面会に来た者は必ず、

「あれ、いいもん食ってんじゃないの……」

なんて言うのに決っているのですが、クリーム・シチューといっても、糊のようなメリケン粉のドロドロですし、煮魚というのだって、魚の原形をとどめない猫用の缶詰みたいなもので、刑務所の献立なんてものは、「私立学校の校歌」みたいなものなのです。

懲役は、とにかく腹を空かせているので、普段のこんな飯でも一気に食べ^お了えて、それから初めて、そんな物を食^もわされこき使^もわれている、自分の悲しさに思い至^もるのでした。

物^も相飯^めも、府中刑務所では五等から二等まで、量の差で四等級に分れていました。

懲罰房は最小の五等飯^{ごとうめし}で、これは普通のごはん茶碗に一杯ほどでしたが、木工場の懲役たちは最大の二等飯でしたから、量だけは五等飯の倍以上もあったでしょう。

飢えた様子の懲役たちは、だから空腹感というより、献立ヅラとは違^ひう非道^{ひど}い内容のおかずのせいで、栄養素と動物性蛋白質の慢性的な欠乏に苦しんでいたように思うのです。

府中刑務所は暮の二十九日が仕事じまいで、例年この日は、働かされている工場の大掃除です。私もリップソー（回転縦引き鋸）をばらして磨きあげ、丸い刃に機械油をひいたりしました。

三十日から正月の三日までは免業めんぎょうになって、仕事も裸檢身カシカンオトリもないうえに、大晦日の夕飯から特食で、物相飯モノサイも白米ギンヤリになり、おかずだって普段とはもうまるで違うのです。

普段は夜の九時にナイトターの途中でも切られてしまうラジオが、紅白歌合戦からずっと、除夜の鐘の鳴り響く十二時半まで延長になります。私の隣りに寝ていた若い京都の極道は、方々のお寺の鐘を聴くうちに、

「このお寺さん、実家のすぐそばでんね」

と声を詰らせて呟つぶやきました。

それでも府中刑務所は、短期刑の刑務所ですから、年が明けると、皆心理的に満期の日が近づいたように感じるのです。

「満期は、さ、来年だ」

と言うのより、来年だ、と言うほうが数日の違いでも、これは大きな違いで、誰でも急に前途が明るくなるようなことでした。

大晦日の夕飯からは、それまでの真黒な麦飯が、ひと粒ずつ、極小のミラー・ボールのように輝く白米ギンヤリになり、三カ日の間はずっとその美味おいしい御飯で、お雑煮も出たのです。

それに元旦の朝飯の前には、一人ずつ折詰と菓子袋も配られます。その年の中身を書いておきましょう。個数の書いてないのはどれも、一つずつです。

折詰の中身は、三角に切つてある羊羹、伊達巻、蒲鉾、豆きんとん、甘く煮た黒い空豆三粒、